

情報モラルと道徳⑥

～資料とのコラボで考える～

北川 忠



1 情報コラム「ききまちがい いいまちがい」

(「ゆたかなこころ1年」光文書院)

誰でも言い間違いぐらいするものだ。この資料では言い間違いをとがめるのではなく、「人は誰でも言い間違いをするものだ」という前提に立ち、人に情報を伝える時には正しく伝えられているかどうかにか気をつけたいというねらいにしたい。そこで、コラボさせる資料だが、今回は2-(1) 礼儀を取り上げてみた。相手を大切にしている形としての礼儀に情報伝達の正確さを関連づけてみようと思う。ただ、資料が直接関連しにくいので、つなぐための段取りを踏む必要があると思う。

2 「だいじな わすれもの」2-(1) 礼儀

(「ゆたかなこころ1年」光文書院)

<ねらい>

◎気持ちのよいあいさつやことばづかいのよさがわかり、話を聞く時は聞き間違いをしないように気をつけようとする。

- ・ひろみが「ごちそうさま」を言うために戻ってきたことに共感する。
- ・お礼を言うことでひろみもお母さんも共に気持ちがよいことがわかる。
- ・礼儀正しくすると自分も他人も気持ちがよいことがわかる。
- ・聞き間違いは自分も他人も困ることがあることがわかる。
- ・自分も他人も気持ちよく生活するために、あいさつだけでなく、言い間違いにも気をつけようとする。

まず、資料を読むが、児童には副読本を開かせず、場面絵と資料の一部、「だいじなわすれものをしっちゃったの。」このあとの展開を隠しておき、「ひろみさんは何を忘れたのでしょうか。」と問う。考えるヒントとしてお辞儀をしている場面絵と、お母さんの「ひろみちゃんて、いいこね。」の文字カード。いろいろ想像させた後で正解を見せる。

続いて、ひろみにとって「どうしてごちそうさまを、忘れることが謝るほど悪いことなのか」について考えさせて、作ってくれた人の気持ちにあらがとうの気持ちを返さなければ失礼であるという所にたどり着かせたい。感謝の言葉は相手を大切にしている心の表れであり、自分も相手も気持ちがよくなることであることを教える。次に先の「ききまちがい いいまちがい」を読む。注目させるポイントは「ききまちがい」である。「ききまちがえた」から「いいまちがえた」のだ。この資料は笑い話のような話であるが、「あけみちゃんが他の子に間違えた花の名前を教えて、信じた子がまた次の子に伝えていったとしたらどうなるか」を考えさせる。信じた子はどこかで恥をかくことになるのだが、また聞きした場合、初めに言った子ではない子が恥をかくことになる。子どもが間違えた情報が広まることの問題に気づいたなら、相手も自分も困ることのないように新しく知ったことを人に話す時はよく確かめた方がよいと気づかせていく。そして聞き間違いを防ぐにはどうすればいいかを考えさせてみるとよいだろう。今まで聞いたことがなく、自分の知識の中にない言葉を聞き間違いするのなら、買い物を頼まれた時に自分が困らないようにするにはどうするかを考えると、あやふやな記憶に頼らずメモを取ればよいことは容易に理解できる。つまり、メモを取ることが確認する作業になるわけだ。ただ、あまり情報の正確さにばかり言及すると子どもの心から前半で学習した「礼儀」が飛んでしまうので、板書を構造的に書き、二つの価値が相手も自分も困らず、気持ちよく生活するためであることを押さえておくことが必要だと思う。

3 最後に

情報モラルはスキル重視になると、道徳の学習ではなくなってしまう。「もと」を見据えた心を育てる指導に授業の基盤を置いて行きたい。